

西日本工業大学 正会員 ○玉田 文吾
 " " " 福田 順二

1. まえがき

長崎県口立津地区には、地すべり面の平均深度 $1\sim 2m$ の小規模な地すべりが発生する。多くの場合、地表面の亀裂発生、隆起、陥没、あるいは石積の張出し、家屋の傾斜など、これららの現象も特に顕著ではなく、数年に亘って進行することによって発見または認定される程度のものである。この種の地すべりは、平常時は滑動せず、降雨後、 $180mm$ 程度の日降雨量によって滑動することが知られ、その機構については報告した。⁽¹⁾ ただ、条件が揃つた場合でも、移動量 $5\sim 10mm$ で停止し、崩落するには至っていない。これは、降雨によって発生した間隙水圧が、時間経過と共に減少することに大きな原因があるが、⁽²⁾ 移動量の状況と間隙水圧の時間的変化から推定すると、これだけでは説明できない部分がある。

このような小規模、かつ浅層地すべりにおいて、滑動開始後、地すべり面のせん断抵抗がどのように変化するかについて実験し、上記の点について考察したものが今回の報告である。

2. 実験装置と方法

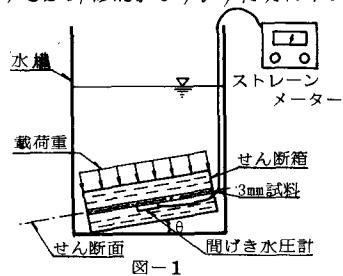
口立津地区において、テストピットを掘削し、この種の地すべり面を観察すると、厚さ $2\sim 3mm$ 、上下の部分に比較して $4\sim 7\%$ 含水比が多い軟弱な飽和粘土が付着している。実験装置の概略は、図-1 のようであり、地すべり面から剥離した試料を直径 $20cm$ 、厚さ $3mm$ の飽和粘土としてせん断箱に詰めるが、この薄層部分がせん断されるようになっている。試料の上下には、これよりも含水比の小さい粘性土がそれを $10mm$ ずつあって（この部分は、厚さ $3mm$ の薄層部分のせん断特性に影響を及ぼさない）、さらにその上下には、ポーラスストンが置いている。地すべり面の平均深度 $1.5m$ に相当する垂直応力を加え、圧密完了後、この付近の地すべり面傾斜と同じく、水平面に対する角度 $\theta = 10^\circ \sim 15^\circ$ にセットするが、これは、 $W \sin \theta$ のせん断力を加えるためで、せん断条件は、薄層正規圧密粘土の非排水形式になる。

厚さ $3mm$ の試料に接して、間隙水圧計（東京測器、PWG-1FS、直径 $42cm$ 、高さ $2.5cm$ 、容量 $15ml/cm^2$ ）が設置してある。このせん断箱全体は水槽中にあり、降雨時に発生する間隙水圧 u_w を与えるため水深を増して行き、滑動開始時のデーターが得られるようとしたものである。各変位量は、防水ダイヤルゲージで測定する。

3. 実験結果の考察

三軸圧縮試験において、圧密非排水試験を行なうと、正規圧密粘土では正の間隙水圧、過圧密粘土では負の間隙水圧を発生する。⁽⁴⁾ 地すべり粘土は正規圧密粘土であるため、⁽⁵⁾ 地すべり面が滑動中ににおいては正の間隙水圧 u_w （過剰間隙水圧）が発生する筈であり、現地においても正の過剰間隙水圧が測定されている例は多い。⁽⁶⁾ しかし、せん断部分が薄く、垂直応力が小さい場合 ($0.25kg/cm^2$ 以下) には、負の間隙水圧が発生する場合があることが見いだされた。

(1) 図-2 は間隙水圧の変化を示したものである。水槽中の水深を段階的に増して行くと、間隙水圧 u_w も付随して増加する。今般用いた地すべり粘土（試料）の物理的性質は、表-1 のようであるが、水深と間隙水圧との数値とが一致するものは、若干の時間を要する。同じ現象は、現地においても見られ、降雨のピークが過ぎた頃から滑動を開始する傾向がある。滑動開始とともに僅かな正の過剰間隙水圧が発生する。その後、負の過剰間



隙水圧が現れ、間もなく滑動を停止し、暫くして再度滑動する現象が見られる。引続き滑動させたためには u_w を可成大きくする必要がある。

一方、せん断箱を $\theta = 0^\circ$ にしてせん断力を加えたとき、水平変位量を δ_h 、ダイレタンシーを δ_r 、過剰間隙水圧を u で表し、これらの関係を図示したものが、図-3である。頁の過剰間隙水圧が現れるのは、正のダイレタンシー（膨脹）に基づくもので、せん断面の薄層部分は、これに伴なってすぐには吸水が行なわれないことを意味する。

現地においては、吸水するにはさすに時間を必要するものと思われる。

(2) 薄層試料の滑動直後のせん断特性は、 $C' \approx 0$, $\phi' > 0$ にがるこれが判明しているが、これを安全率の形式で表すと、

$$F_s = \tan \phi' \sum (W \cos \theta - u_w) / \sum W \sin \theta \quad \text{--- (1)}$$

にがる。実験装置において、 W , θ , ϕ' の値は一定であり、水深を増すことによって滑動するのは、 u_w の増加である。したがって滑動後、頁の過剰間隙水圧 u が発生したときは、式(1)はつぎのようになる。

$$F_s = C' + \tan \phi' \sum (W \cos \theta - u_w + u) / \sum W \sin \theta \quad \text{--- (2)}$$

ここで C' は滑動によって生じる粘着力であるが 0.02 kg/cm^2 以下の値である。⁽⁹⁾ 二のようく、頁の過剰間隙水圧は、これが一時的にせよ制動作用をする。表-2は、 u/u_w の比率を示したものである。条件によって、この比率は可成大きくなり無視できまい値になる。頁の過剰間隙水圧と地すべり面の移動速度との関係、同じく物理的性質との関係については別の機会にしたい。

(3) 垂直応力が 0.6 kg/cm^2 をこえると、滑動開始と共に正の過剰間隙水圧が発生する。したがって口元津地区においても 4.0 m をこえるものについては、式(2)の考え方を適用できまい。ただ一回の移動量が 10 mm をこえると、頁の過剰間隙水圧が作用するようになる。(正から頁へ変化するところが分かれている。⁽¹⁰⁾)

(4) 今般の実験によると、徐々に水深を増した場合、式(1)の計算値をこえても滑動しない場合がある。このとき装置全体をハンマーで叩くなどの衝撃を与えると容易に滑動を開始する。このときには可成はつきりした正の過剰間隙水圧が発生して徐々に減少するが、これは試料の間隙比がによって変化があるので、衝撃によって頁のダイレタンシー（圧縮）が発生するためである。この場合も式(2)は適用できず、正の過剰間隙水圧によって加速作用を伴う。現在、振動または震動との相関性について測定中であるが、この現象は現地の例としても報告されている。⁽¹¹⁾

滑動直後の頁の過剰間隙水圧は、特殊な地層条件において発生するもので、一般的な現象ではないが、これによつて口元津地区における一部の地すべりの移動がうまく説明できる。今般の実験結果によると、同じ浅層地すべりにおいても、発生する過剰間隙水圧の量には可成の差違があり、各地すべりをあげ出雲がんばり特性をもつてゐることが推定できる。このため、ある地域の同種と見られる地すべりにおいても、画一的取り扱い方をすることができず、この点に地すべりの複雑性と解析上の問題点があると考える。

[参考文献] (1) 玉田：口元津地区における表層地すべりの発生機構：地すべり 14, 3 (2) 玉田：長崎県における降雨と地すべりとの関係：第15回自然災害シンポジウム，(3) 玉田：地すべり面の力学的性質と土質試験法：地すべり 11, 1, (4) 山口柏樹：土質力学、技報堂，(5) 文献(3)，(6) 玉田・前田：長崎県平山地すべり地区の降雨による滑動機構：地すべり 12, 2, (7) 玉田：地すべり面の滑動中ににおける C の変化：第15回土質工学研究発表会，(8) 文献(2)，(9) 玉田：地すべり面の C , ϕ と安全率、未発表，(10) 文献(7), (11) 仲野昭次郎：振動地区における微動と地すべりとの関係：地すべり学会第18回研究発表会。

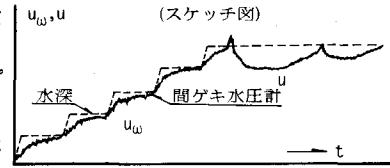


図-2

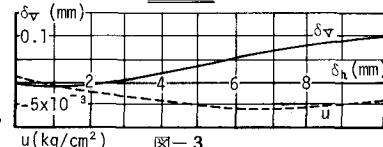


図-3

表-1

土粒子比重	2.798
液性限界 (%)	64.40
塑性限界 (%)	36.39
塑性指数 (%)	28.01
砂 分 (%)	6.4
シルト分 (%)	42.6
粘土分 (%)	51.0

含水比(%)	深度(m)	$u(\text{kg}/\text{cm}^2)$	u/u_w
44.38	41.5	0.0014	0.0337
49.66	42.0	0.0138	0.3286
50.84	40.5	0.0067	0.1652
54.52	40.0	0.0076	0.1900

表-2